

②6 露心新居賀摺

杉間から折り出しけり畚おろし
鶏なくやはや見へわたる田の水
袖埃り払ふて這入礼者かな
結ふ間もとくくといふ清水かな
あせ豆のかいわりみへて五月晴
藪入の珍らしかるや川手水
山間や霧はわら家の上をふく
雨水の日を吹とるやはつあらし
稲妻や人気やしなふ宵の風
草の戸やさうふ葺にもよい高さ
老の手にひとつ縫けり屠蘇袋
枯野吹く空の限りやつく波山
人里のみへてなかる、しみつ哉
山の外隈なき海の初日かな
来て見れば早友のあり朝桜
与所の子はみなよく見ゆるをとり哉
かち渉りして猶暑き堤かな
立時におほへたまでそ屠蘇の酔
梅折るや外にまきる、音もなし
はつ蝶のいてしあたりか草の色
卵の花やわたり瀬問ひに立もとる
庭先は隣の蔵や批把の花
曳はさてなか／＼重き鳴子哉
引先に夕雲かゝるなるこかな
藤の実の天窓にさはる清水かな
透間なく春をふくみしやなき哉
実に撓む海のわか葉や朝日和
端山路やほつと二列のわすれ咲
はつ虹や駕も囀る柳かな
雉子は鳴水は流れて野は静
岸す、し柳はさみて並ふ家
遠山やかすみしま、の夕月夜
ぬけ道に垣結ふてあり梅の花
くもる日は猶香のふかしうめ林
木つ、きの覗て行ぬ藁ひさし
雪若菜見人と摘人とわかれけり

梅通 公成 九起 蒼山 五律 鳥岳 淡節 黙池 有節 昇左 知風 田美 潮水 梅圃 蘭操 挙一 素屋 梅裡 一清 羽州 棗地 乙也 九峯 嵐牛 杜水 蓬宇 完伍 麦鳥 □□ 橘外 草尺 半夢 禾田 左一 ミき守 薫岱

無事てまた顔見せられよ花の主
をしけなく人中通る角力かな
人足は常にかはらす秋のくれ
朝晴や雪に埋れし庭かたち
はつ秋やよく寐てけさは未だ早き
初雞の声や心のあらたまり
隠れ家やおもひもよらぬ門礼者
好きらひ聞かて出しけり屠蘇の酒
夕かほや月の入るまで高咄し
漕出して右左なし月の船
はるの日や硯のへりに蠅の来る
蛤や時の果報の敷まつ葉
とり巻て咲や祠は梅の神
ばつ蛙鳴や野を行月夜の灯
みこもらぬ雀少なき日和かな
なつかしや山またやまの遠きぬた
詠やるこゝろ老けり紅のはな
月見へて暮もいそかぬ柳かな
野の萱もそよく風なき月夜哉
元日や海と空との色ふかし
羽遣ひも軽し若葉に遊ぶ鳥
後れ来てひとり念入る御慶哉
けふの月雲の居ところ尋ねけり
青柳の影に澄きる田水かな
坐敷まで終に來馴て雀の子
さし汐の戦きかゝるや若みとり
若水やうれしきまゝの汲いそぎ
田から立風もかすむや麦の上
あら磯のものとおもはぬ白魚哉
いねつむや梅ある窓を枕もと
花に來て音なくなりぬ松の風
ちきれ雲行やいつこの初しくれ
蟬鳴や干かけてあるさらし布
元日や巨燧はなれし福寿草
山笑ふ頃や朝茶も味のよき
屑とて□ひと籠もあ□早苗哉
風まてか來てす、しさや湊口
朝顔に気は澄しけり神詣

一山 田都二 白羽 一稱 完鷗 涼花 喜山 素心 麦露 溪齋 只有 大夢 柳壺 丹嶺 恁平 慶里 市猿 柳臯 習静 古棠 李朗 文帶 文貞 青花 律正 かすみ 五具 鷺眠 渭川 龍湖 雲底 淡處 省我 其残 嵐松 □□ 未貫 成章